

# 門司の低迷

田中 辰明

お茶の水女子大学名誉教授

本誌2025年12月号では「門司の盛衰記」を報告した。本稿では、そこで取り上げきれなかった建築を中心に紹介する。

## 1. 門司港レトロハイマート

門司港レトロハイマート(写真1)は、建築家黒川紀章の設計により、1999(平成11)年1月に竣工した。地上31階建て、全146戸を有する高層タワーである。

当初はホテルとして計画されたが、門司港の衰退に伴い宿泊需要が伸びず、現在は分譲マンションとして利用されている。最上階(31階)は北九州市が取得し、「門司港レトロ展望台」として一般公開されており、関門海峡を一望できる貴重な展望施設となっている。

建設当時、この建物は門司港の「レトロ景観」との不調

和が指摘され、「高層建築そのものが場違いである」、「背後の山並み(和布刈山・古城山)の眺望を遮る」といった理由から、住民や行政を巻き込んだ激しい対立を招き、訴訟問題にまで発展した。

しかし現在では評価は変化し、門司港レトロを象徴するランドマークの一つとして認識されている。展望台からの眺望の魅力や、街並みにアクセントを与える存在として、肯定的に捉える意見も多い。

居住環境としての評価も比較的高く、転売価格は上昇傾向にある。一方で、設備の老朽化や商業施設の不足といった課題も指摘されている。また景観面では、「周囲の低層レトロ建築と調和していない」、「黒いタワーが浮いて見える」といった批判も依然として残る。

それでも、時間の経過とともに人々の視覚に馴染み、展望施設としての成功や周辺の観光地化の進展と相まって、かつて「異物」とみなされた存在は、次第に「風景の一部」へと受け入れられつつある。

この建物は、歴史的景観と現代建築の衝突、そしてその後の和解を象徴する存在といえる。その意味において、京都タワーとの類似性も指摘できる。

## 2. 三宜楼

三宜楼(写真2~8)は、門司港を代表する高級料亭であり、1906(明治39)年に創業した。現在の建物は1931



写真1 賛否両論の門司港レトロハイマート(黒川紀章設計)



写真2 三宜楼外観



写真3 三宜楼玄関



写真4 三宜楼出世階段(佐藤栄作、出光佐三ら後の有名人が昇ったことから「出世階段」と呼ばれた)



写真5 三宜楼百畳間舞台



写真6 三宜楼小規模客室



写真7 三宜楼飾り障子

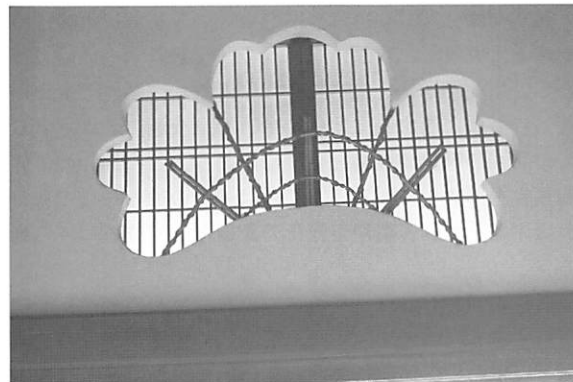


写真8 三宜楼飾り障子

(昭和6)年に再建されたもので、木造3階建の大規模和風建築として、現存する料亭建築の中では九州最大級を誇る。

当時の門司港は、横浜や神戸と並ぶ国際貿易港として繁栄し、40軒以上の料亭が軒を連ねる「社交都市」であった。その中であって三宜楼は、代表格ともいえる高級料亭であった。

また、俳人・高浜虚子が主宰した俳句結社および雑誌

『ホトトギス』の影響は全国に及び、門司にも多くの門人が存在した。このため門司は単なる訪問地にとどまらず、虚子の俳句活動における地方的拠点の一つとなっていた。虚子自身も三宜楼をたびたび利用していたとされる。さらに、門司鉄道管理局に勤務していた佐藤栄作や、出光興産の創業者・出光佐三をはじめ、政財界や文化人の社交の場としても用いられたほか、商社や海運関係者による接待や情報交換の場としても重要な役割を果たして

いた。

建築的には、木造3階建の大規模な和風建築であり、「百畳間」と呼ばれる大広間を備えるほか、欄間・窓・装飾などが各室ごとに趣向を変えて設えられている。また、芸妓の舞や宴会が行われた舞台付きの大広間も残されており、当時の花街文化を今に伝える貴重な空間となっている。

門司港の港まつり(正式名称:門司みなと祭)は、単なる観光行事ではなく、都市の繁栄を象徴し、再確認するための装置として生まれたものである。商業都市としての結束を強め、その発展を祝うことを目的に、1934(昭和9)年に発足し、日本有数の港祭りへと発展した。(2026年は5月23日~24日に第81回の港まつりが開催された)

特に1950年の朝鮮戦争の頃、門司は大いに賑わいを見せた。港まつりでは、祝賀パレードや総踊り、バナナの叩き売りの再現などが行われ、華やかな催しが繰り広げられた。パレードでは、駐留米兵の行進に加え、三宜楼からは100名にも及ぶ芸者が繰り出し、艶やかな魅力と色香を放ったという。

このように三宜楼は、門司港の栄華を象徴する存在であった。

### めかり 3. 和布刈神社

和布刈神社(写真9)は、関門海峡の最狭部に近接する断崖上に位置し、古来、航海安全・交通安全・厄除の神として広範な信仰を集めてきた。とりわけ潮流の変化が著しい海域に面する立地条件は、海上交通の結節点としての門司の歴史的な性格と密接に関わり、この神社の信仰的基盤を形成している。主祭神は祓戸の神の一柱である瀬織津姫とされ、清浄と浄化の象徴として位置づけられる。

名称の「和布刈」は、ワカメの採取行為を指示する語に由来する。この地では古来、海産物の採取が単なる生業にとどまらず、祭祀行為として体系化されてきた経緯があり、神社名はその文化的記憶を今日に伝えるものである。

神社を特徴づける神事として、旧暦正月に執行される和布刈神事が挙げられる。深夜、神職が海中に入りワカメを刈り取り、これを神前に供する一連の所作は、国家安泰や五穀豊穰を祈念する儀礼として継承されている。その起源は神功皇后の伝承に求められるとされ、かがり火のみを光源とする暗闇の中での執行は、視覚的にも極めて象徴性の高い祭祀空間を現出させる。

創建年代は詳らかではないが、古代以来、関門海峡と

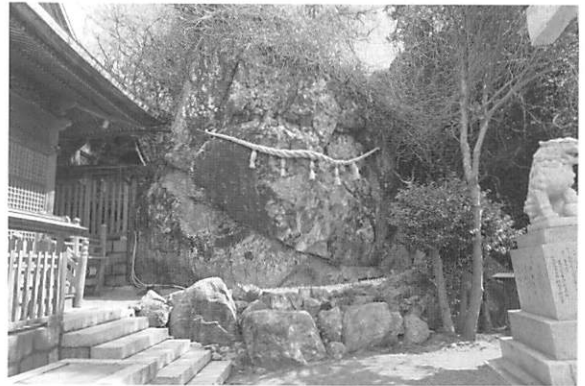


写真9 和布刈神社



写真10 和布刈神社境内にあり、閉店となった「沈潮閣」

いう地政学的要衝を守護する存在として機能してきた点は重要である。本州と九州を結ぶ交通の結節点において、神社は単なる宗教施設を超え、地域社会と広域交通の安全を支える装置として位置づけられる。

建築的には、海に迫る急峻な地形に応答する形で社殿群が配置されており、自然地形と構築物との緊張関係が際立つ。前面には関門海峡が大きく開け、対岸の下関市を望む視界は、潮流のダイナミズムを直接的に体感させる。とりわけ夕刻から夜間にかけては、関門橋の照明と相まって、海峡景観と人工構築物が織りなす視覚的連続性が顕在化する。

以上のように和布刈神社は、海と人間活動との関係性、海産資源をめぐる食文化、さらには国家的秩序の安定を祈願する祭祀体系といった複合的要素を内包し、それらを空間的・儀礼的に統合する場として理解されるべき存在である。

神社の境内には、かつて「沈潮閣」と呼ばれる高級日本料理店が存在していた。建物は関門海峡へとせり出すように建てられ、激しい潮流を眼前に眺めながら食事を楽しむことができた。ここから対岸の下関とは僅か600mしか離れていない。対岸の下関は源平合戦で平家が敗れ

た壇之浦である。沈潮閣は芸術作品のように美しく飾られたふぐ料理で知られていた。

筆者も和布刈神社を訪れた折、沈潮閣でふぐ料理を味わおうと考えたが、店の前には「立ち入り禁止」の掲示があった。すなわち、すでに閉店していたのである。この事実、衰退しつつある門司の現状を象徴するものとして、受け止めざるを得なかった(写真10)。

#### 4. 繁栄した門司の低迷

1963年、門司・小倉・若松・八幡・戸畑の五市が統合され、北九州市が誕生した。この合併は、日本における政令指定都市の創設を見据えた先駆的な広域再編であり、当時としては都市の競争力強化を意図した積極的な政策であった。

しかし、この都市再編の過程とその後の経済構造の変化の中で、かつて国際港湾都市として繁栄した門司は、相対的にその地位を低下させていくこととなる。その要因は単一ではなく、いくつかの歴史的・構造的変化が複合的に作用した結果といえる。

第一に、港湾機能の変容である。門司は明治期から戦前にかけて、中国大陸や朝鮮半島との交易、さらには関釜連絡船の発着港として発展し、日本の対外交渉の重要な結節点であった。しかし戦後、植民地の喪失と航路の再編により、こうした国際的役割は大きく縮小する。加えて、港湾機能は次第に工業生産と結びついた地域へと移行し、より内陸に近い小倉や八幡側がその中心となっていった。

第二に、産業構造の転換が挙げられる。北九州地域は八幡製鐵所を核とする重工業都市として成長を遂げ、製鉄・化学工業が地域経済を牽引した。この結果、都市機能の中心は工業集積地である八幡と、商業・行政機能を担う小倉へと移行し、港湾商業都市としての性格を有していた門司は、相対的に周縁化していった。

第三に、交通体系の変化が都市の役割を大きく書き換えた。かつて門司は本州と九州を結ぶ「玄関口」として機能していたが、関門トンネルの開通や関門橋の整備により、交通の流れは連続化される。これにより、門司は「終点の港」から「通過される都市」へと位置づけを変え、都市としての求心力を徐々に失っていった。

さらに、五市合併後の都市政策も影響を及ぼした。行政機能や商業投資は主として小倉地区に集中し、現在に至るまで都市の中心は小倉駅周辺に形成されている。その結果、門司は行政中枢としての役割を担うことなく、観光や住宅を主とする地域へと性格を変化させていった。



写真 11 旧門司電話交換局(現在は NTT の博物館)(山田守設計)

では、門司はこの合併に強く反対していたのだろうか。史料的には一定の慎重論は存在したものの、合併を阻止するほどの強い反対運動には至らなかったとされる。当時はむしろ、単独市としての将来に対する不安が共有されており、広域都市としての発展を志向する機運が優勢であった。門司においても、すでに港湾機能の低下や経済基盤の弱体化が意識され始めており、合併はそうした衰退を回避するための現実的な選択肢として受け止められていた側面がある。

以上のように、門司の相対的な衰退は、五市合併そのものに直接起因するというよりも、港湾機能の縮小、重工業化による都市構造の再編、交通インフラの進展、さらには都市機能の集中といった複数の要因が重なり合った結果として理解されるべきである。それは一都市の盛衰というより、戦後日本の経済構造転換の中で都市の役割が再定義されていく過程を示す事例といえるだろう。

門司のかつての繁栄を示す建築として、山田守が設計した旧門司電話交換局(写真11)がある。現在、この建物はNTTの博物館として利用されている。竣工は1924年(大正13年)である。なお、この写真からは人通りの少なさもうかがえる。

#### おわりに

筆者が門司の町で道に迷った狸のような顔をしてうろろしていると「何かお困りですか?」と妙齢の婦人が声を掛けてくれた。探していた建物の名を言うと丁寧に案内してくれた。昔繁栄し、現在衰退した街の住人は一般に親切である。

#### 〈参考文献〉

1. 田中辰明 関門の建築を訪ねて：月刊建築仕上技術2014年12月号
2. 田中辰明 門司の盛衰記：月刊建築仕上技術2025年12月号
3. 内山昌子 愛しの門司港